

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事

せつこしようぐんごしよ

(石虎将軍御書)

しじょうきんご どのごへんじ せつこしょうぐんごしよ

四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）

こうあんがんねん

うるう

がつ

にち

さい

しじょうきんご

弘安元年(78)

閏10月22日

57歳

四条金吾

こんげつにじゅうににち

しなの

おく

そうちら

もの

につき

ぜに

今月二十二日、信濃より贈られ候いし物の日記、錢

さんかんもん はくまい のうこめたわらひと

もいちごじつまい

さけおおつつひと

こづつ

三貫文、白米・能米俵一つ、餅五十枚、酒大筒一つ・小筒

こづえ

ひとつ、串柿五把、柘榴十。

そ おう たみ じき たみ おう じき

ころも かんおん

防

夫れ、王は民を食とし、民は王を食とす。衣は寒温をふせ

じき しんみよう 助 たと

あぶら ひ つ

みず うお

ぎ、食は身命をたすべく。譬えば、油の火を継ぎ、水の魚を

たす

ひと がい

ちよう

ひと

がい

おそ

こづえ

す

助くるがごとし。鳥は人の害せんことを恐れて木末に巢く

ひと

ち

罠

うお

う。しかれども、食のために地におりてわなにかかる。魚は

淵の底に住んで、浅きことを悲しみて、穴を水の底に掘つ
てすめども、餌にばかされて鉤をのむ。飲食と衣薬とに過ぎ
たる人の宝や候べき。

しかるに、日蓮は他人にことなる上、山林の栖、なかん
ずく今年は、疫癪・飢渴に春夏は過ぎ越し、秋冬はまた前に
も過ぎたり。また身に当たつて所労大事になりて候いつる
を、かたがたの御薬と申し、小袖、彼のしなじなの御治法
に、ようよう驗し候いて、今、所労平愈し、本よりも
いさぎよくなりて候。弥勒菩薩の瑜伽論、龍樹菩薩の

潔

そらう

みくすり

おんくすり

みろくぼさつ

ゆがるん

りゆうじゅぼさつ

大論を見候えば、定業の者は薬変じて毒となる、法華経
は毒変じて薬となると見えて候。日蓮、不肖の身に
法華経を弘めんとし候えば、天魔競いて食をうばわんとす
るかと思つて歎かず候いつるに、今度の命たすかり候
は、ひとえに釈迦仏の貴辺の身に入り替わらせ給いて御た
すけ候か。

これはさておきぬ。今度の御返りは神を失つて歎き
候いつるに、事故なく鎌倉に御帰り候こと、悦びいくそ
ばくぞ。余りの覚束なさに、鎌倉より来る者ごとに問い合わせ候

いつれば、ある人は湯本にて行き合わせ給うと云い、ある人
はこうづにと、ある人は鎌倉にと申し候いしにこそ、心落
ち居て候え。これより後は、おぼろけならずば、御渡りあ
るべからず。大事の御事候わば、御使いにて 承り候べ
し。返す返す今度の道は、あまりにおぼつかなく候いつる
なり。

敵と申す者は、わすれさせてねらうものなり。これより
後に、もしやの御旅には、御馬をおしませ給うべからず。

よき馬にのらせ給え。また供の者ども、せんにあいぬべか

者

胴

丸

持

上

おんうま

たも

らんもの、またどうまろもちあげぬべからん御馬にのり給うべし。

摩訶止觀第八に云わく、弘決第八に云わく「必ず心の固きに仮つて、神の守り則ち強し」云々。神の護ると申すも、人の心つよきによるとみえて候。法華経はよきつるぎなれども、つかう人によりて物をきり候か。

されば、末法にこの経をひろめん人々、舍利弗と迦葉と、觀音と妙音と、文殊と藥王と、これら程の人やは候べき。二乗は見思を断じて六道を出でて候。菩薩は四十一品の

無明を断じて十四夜の月のごとし。しかれども、これらの

ひとびと 譲 たま
じゅうしゃ つき
ひとびと
じゆ ぼさつ ゆず たま
よ よ こころ 鍛 たも
りこうしそうぐん もう
李広將軍と申せしつわものは、虎に母を食われて、虎に
に 兵 とら
いし い
似たる石を射しかば、その矢、羽ぶくらまでせめぬ。後に石
み た 猪 とら
かたき もう
と見ては立つことなし。後には石虎將軍と申しき。貴辺も
またかくのことく、敵はねらうらめども、法華經の御信心
ごうじょう だいなん 予 き そういう
ごうじょう
強盛なれば、大難もかねて消え候か。これにつけても能
よ かみ つ
く能く御信心あるべし。委しく紙には尽くしがたし。恐々

れば、能く能く心をきたわせ給うにや。

きんげん

謹言。

こうあんがんねんつちのえとらのちのじゅうがつにじゅうににち

弘安元年 戊寅後十月二十一日

にちれん
日蓮

かおう
花押

しじょうさえもんどのごへんじ
四条左衛門殿御返事